5 月 1 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　10：　7 – 18

「わたしは良い羊飼いである」

「牧師」には「羊飼い」という意味があります。では、「良い羊飼い」＝「良い牧師」の条件には何が考えられるでしょうか。説教のうまさでしょうか。賛美歌を上手に歌えることでしょうか。訪問の回数、筆まめに手紙を書くことも考えられます。あるいは、祈りの力強さもあるでしょう。いずれを満たしても「良い牧師」と呼ぶにふさわしい条件と言えます。

一方、イエスの言われる「良い羊飼い」は明快です。

「良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」(ヨハネによる福音書 10:11)

命を捨てることは、人間にとって簡単なことではありません。それどころか、命の道をしっかりと歩むことを求められている人間の道から外れてしまうようにも思えます。イエスも真の人間としてこの地上に来られた以上、神のその思いを知っておられたはずです。人生を全うすることこそが人の道であると。

しかし、イエスは「命を捨てる」道へと導かれていくのです。ただし、これは、むやみやたらに命を危険にさらすこととは異なります。もちろん、自己実現のためでもなければ、自暴自棄になったのでもありません。

「わたしは命を、再び受けるために、捨てる。」(ヨハネによる福音書 10:17)

イエスは十字架の先に復活があることを確信しておられるから、神の備えた道をためらうことなく進まれるのです。

「わたしは良い羊飼いである。」(ヨハネによる福音書 10:11, 14)

その良い羊飼いは「自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」(ヨハネによる福音書 10:14)。神ご自身が牧者として人を導かれるのです(「まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。」エゼキエル書 34:11)。

しかも、「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」(ヨハネによる福音書 10:16)と言われます。実際、イエスは「自分の目で見るまでは信じない」とうそぶいたトマスを見捨てることなく、復活の姿を見せられました。それは、「羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるため」(ヨハネによる福音書 10:10)に働かれた結果でした。

もちろん、他に頼る術がない一人であっても招き、導かれます。招かれた者は安心して過ごすことができます(「主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴い／魂を生き返らせてくださる。」詩編 23:2-3)。真の羊飼いの支えによって歩むことができるのです(「主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。」詩編 23:1)。

そして、今度はともに羊を養う道へと招かれます(「あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。」ペトロの手紙一 5:2)。自分一人が安心するばかりでなく、全ての人のために働かれる良い羊飼いがおられることを伝える道へと招かれます。

私たちは一人でその道を歩むのではありません。私たちのために身を挺して働かれる良い羊飼いと共に歩みます。私たちはその助けの中で今日も生かされているのです。